

塙保己一

(はなわきいち)

「田あきは不自由だナ！」といつた塙保己一のはなしを、最近よく思い出します。

塙保己一という人物は、江戸時代中期に出た偉大な国学者です。五歳で失明しましたが、その抜群な記憶力によって万巻の書物を読み破り、幕府の保護のもとに『群書類従』という古い書物二千冊を編纂したほどの大学者です。その塙保己一が弟子の学生に講義をしていた時、突風が吹き込んで、蝶燭の灯(ひ)が一斉に消えました。保己一先生は全盲の人ですからそんなことはわかりません。講義を続けたわけです。

「お待ち下さい先生。あかりが消えました。本が読めません。ちょっとお待ち下さい」と弟子たちが騒いだのに保己一先生のおっしゃった言葉。

「目あきは 不自由だナ！」

普通私達は反対に考えています。自分が見えないということはさぞかし不自由。それにひきかえ目のあいている自分は自由でしあわせだと考えます。

最近だんだん目が見えなくなる私は、これから迎えるかもしれない盲目の世界のことを思うに付け、今まで目があいて過ごした六十何年かが、本当に自由であわせであったのかどうか、そんなことが思われて仕方ありません。

このあいた目で本当に思いのままに実なものを見て自由に生きてきたのであろうか。わたしの今までの一生は、世に言う「目をあけて 眠っている者ほど起きこしにくい」というあれではなかったのだろうか。ちょっと明かりが消えたから、もう何も見えなくなつて右往左往しながら、もう何も見えなくなつて右往左往しなければならない世界を、しかし物知り顔・わがもの顔・わがみあり顔に生きてきた愚かさはかなさを、今に至つてしまつた。

じみと思わずにはおれませぬ。一寸先も見えない目をあて頼りに、見えたつもり知つたつもりで生きて来た私を、塙保己一、かえつて盲目の中に真実を見た目から見れば、「田あきは不自由なものだナ！」と哀れまれるのでしょう。

ほんとうに久しぶりに、いま生かされているいのちの大切さを実感させられた。ユーモアをまじえてわかのやくお話し下さいました。会員みな、わがことわがことと、ここにしみて聴聞させました。ありがとうございました。

仏婦事務局



出石組仏婦連盟会 総会報告



6月16日は梅雨どきめずらしいお天気でした。

会場当番の西宗寺の仏婦のみなさん、総会準備ほんとうに御苦労されました。いたれりつくせりのおもてなし、もつたいなく思いました。

ことに本期連盟会長の加藤幸代さまがご病氣入院中とあってその代行を勤めていただいた副会長の吉谷英子さまのご心労なみたいていではなかつたと察せられました。その吉谷さまのご挨拶のなかに、「こんなわたしが、この総会の責任を果せたのは、みな坊守さま方のご指導ご協力があつたおかげです」とおっしゃつていました。

このことばのなかに、仏婦活動といふものは、やはりみんなの協力でなりたつものだなとつくづく思わせられました。そのいい見本が今度の総会であつたようになります。

総会行事は手際よくすすめられ、追悼法要も厳粛にはこばれました。

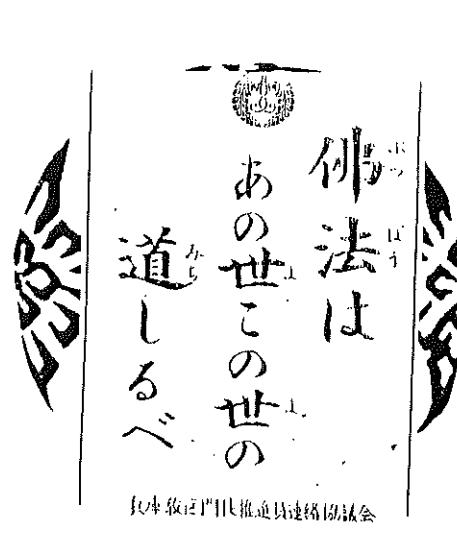
総会行事のうち、勝林寺仏婦会長宮嶋さまの「兵庫教区仏婦連盟総会の報告」は、今までになかつたこころみだけに、ひとしおの感銘をよびました。

午後からは同朋講座(西池哲俊住職)につづいて、ご本山から教育局組織部長である藤実無極先生がおみえになりご法話くださいました。「くらしのなかにお法念仏を」ということで、ことに「布施」のくらしについてお話し下さいました。

考えてみると豊岡での三年の間に、同じ病院で同じ病の方々。そのうちの懐かしい何人かのかたが亡くなっています。ここまでおいていただいて、出石の家の近くへ帰つてこれているわたしを、喜ばせました。なるべく家の近くが何時に便利であろうと六月二〇日に出石病院に変わさせていただきました。先生・看護婦さん相互に、こまかに連絡をとつて、大しての転院でしたので安心しておれます。

豊岡の先生、看護婦さんには、ほんとうにお世話をになりました。あらゆる手をつくしていただき親身な看護をいただきました。ながら、病状好転できず、申し訳ないことをしました。なるべく家の近くが何時に便利でした。なるべく家の近くが何時に便利でした。なるべく家の近くが何時に便利でした。

病床だより



兵庫教区門徒推進員連絡協議会

例法は あの世この世の 道しるべ

すむつみあいこそ、仏教婦人のくらしかった。ユーモアをまじえてわかのやくお話し下さいました。会員みな、わがことわがことと、ここにしみて聴聞させていただいた一日でした。